

日本放射線看護学会とともに成長する 放射線治療看護の行く先は Future of the radiation therapy nursing which grows by RNSJ

中馬 育子

Ikuko CHUMAN

メディポリス国際陽子線治療センター

Medipolis Proton Therapy and Research Center

第8巻学会誌巻頭言の執筆にあたり、原点に立ち返り2012年9月29日に開催された日本放射線看護学会設立総会の議事録を開きました。表・裏表紙が水色の厚紙で作られた11ページの冊子に目を通すと、2012年5月27日第1回の理事会に始まり、設立総会までの4カ月で、会則や事業計画、学会誌の投稿規定等、学会に必要な組織編成やシステムが協議の上、策定されたことがわかります。初代理事の先生方のご尽力により進み出した放射線看護の高度化を目的とする活動は、2012年第1回総会時会員数122名で走り出し、8年を経て2019年（10月1日時点）には449名の会員が同じ目的に向かい看護を実践しています。そのなかで、今回は放射線治療看護に携わる立場の会員として、放射線治療看護の成長について振り返り、今後の課題を考えたいと思に至りました。

そこで過去8回の学術集会で報告された放射線治療看護に関する一般演題を集計し研究方法別に分類すると表1のとおりになりました。

学会誌の巻頭言で学術集会の演題を振り返るのかと疑問を抱く方もいらっしゃると思いますが、学会発表と学会誌投稿との件数差からは、治療看護分野の会員は学会発表までの水準が多数派という現状が見えてきます。言い換えるならば、放射線治療分野に関わる臨床看護師にとって学術集会で研究発表することさえ、いまだ体制や業務上いくつもの障壁を乗り越え、質向上への熱い思いがなければ成し遂げられないという実情から振り返りの指標にいたしました。

表1. 第1~8回学術集会で報告された放射線治療看護に関する一般演題の研究方法別分類

	2012 弘前	2013 長崎	2014 大阪	2015 鹿児島	2016 東京	2017 名古屋	2018 長崎	2019 福島	
報告数	6	16	30	28	22	24	19	10	155
実践的取組み	0	1	7	7	8	6	5	3	37
事例研究	0	0	2	5	1	5	4	1	18
仮説探索的研究	0	2	11	4	4	3	6	3	33
仮説検証的研究 (看護ケア)	5	12	6	9	4	3	3	0	42
仮説検証的研究 (看護師の体制・質評価)	0	0	1	2	5	4	1	0	13
質的研究	1	1	3	1	0	3	0	3	12

doi: 10.24680/rnsj.8.1_1

報告数が多いものは、①放射線治療看護に関わる検証的研究、②実践的取組みの報告、③仮説探索的研究になります。その背景を思い巡らすと、がん対策基本法（2007年）施行まで、医師と診療放射線技師が主体で放射線治療を行っていた歴史から、看護に関する参考文献が少ないまま、国の施策により放射線治療の進化と拡大が急速に進んだことが影響していると思われます。そのため、同じ分野の会員と頻度の高い経験や現象の要因を共有することを求めており、「標準的な放射線治療看護の追求」が主体であるように思います。したがって今後の課題は、多種多様な患者の反応を質的に分析すること、頻度は少ないが予想外の現象に目を向けること、標準的な看護の研究を継続し、会員との共有にとどまらず、公に共有できるよう論文として世へ出すこと、そのような活動が望まれるのではないのでしょうか。

時間がかかるとは思いますが、結果として放射線治療看護の体系化へ結びつく、そのピースの一つを自分が作ってみようか！とわくわくした気持ちになった方が一人でもいれば幸いです。